

兄の病父は変わった

しまい込んだ体験口に

新聞に母の写真が大きく掲載されていた。1956年ごろ、県外で開かれた被爆者団体行事の模様を伝える記事。家族が被爆していたことを梶野恭子(68)―松山市出身、大阪府在住―が知ったのは、小学3年生の時だった。それまで家庭内で原爆が話題になることはなかった。

「母がしばらく外泊していたのは行事に参加するためだったのか」。当時は原爆の被害をよく知らず、子ども心に何となく聞いてはいけない気がして、父の勇(故人)や、きょうだいの被爆を問うこともなく、そのままになっていた。

大人になって聞いたことだが、母の清子(94)―松山市―は県内の被爆者団体に頼まれ、自分の体験を通して戦争反対を訴えようと出席していた。父は強く参加に反対した、ということだった。「父は、子どもを置いて出掛けるなどいう気持ちや、被爆したことを広めたくない気持ちがあったのか。父は、1歳で被爆して亡くなった姉の広子の名前を原爆死没者名簿に登録する手続きもしていた。それまで、父は被爆

の後遺症がこんなに早く強く出ると思っていたんだと思う」。81年、35歳で病死した兄を納骨した際、後にも先にも一度だけ父の涙を見た。

同じ年、当時34歳だった恭子は、父に誘われ、広島市の平和記念式典に小学生の息子を連れて参加した。母は「広島に行くのはつらすぎ」と言って同行しなかった。

父に誘われ、広島市の平和記念式典に小学生の息子を連れて参加した。母は「広島に行くのはつらすぎ」と言って同行しなかった。

「父ちゃんが変わった」と恭子が感じるようになったのは、胎内被爆した兄の剛の腎臓病が悪化したことだ。「それまで、父は被爆

の後遺症がこんなに早く強く出ると思っていたんだと思う」。81年、35歳で病死した兄を納骨した際、後にも先にも一度だけ父の涙を見た。

父に誘われ、広島市の平和記念式典に小学生の息子を連れて参加した。母は「広島に行くのはつらすぎ」と言って同行しなかった。

「父ちゃんが変わった」と恭子が感じるようになったのは、胎内被爆した兄の剛の腎臓病が悪化したことだ。「それまで、父は被爆

の後遺症がこんなに早く強く出ると思っていたんだと思う」。81年、35歳で病死した兄を納骨した際、後にも先にも一度だけ父の涙を見た。

父に誘われ、広島市の平和記念式典に小学生の息子を連れて参加した。母は「広島に行くのはつらすぎ」と言って同行しなかった。



「この世の中で、戦争べらゝい愚かで残酷なものはないよ。絶対駄目。被爆して亡くなった長女、長男らを思いながら、仏壇に手を合わせる梶野清子
―22日午前、松山市

えひめ 戦後70年

た時だけ、「こんなもんじゃやないぞ」と一言、発した。あれから父は、母が被爆体験を語ることに反対しなくなった。松山市で行われている原爆死没者慰霊祭にも毎年出席し、87歳でこの世を去った。

「戦争は、どれだけ残酷で、いかに長い間、人を不幸にするか。犠牲になるのは力のない弱い人。恭子は家族の姿を通して感じた。母が機会あるごとに言う「戦争は絶対に駄目」という言葉をかみしめている。」

（敬称略、中田佐知子）
―第2部おわり

核の傘求める現政権

広島市立大広島平和研究所副所長の水本和美教授は、原爆開発を世界を一変させた「負の革命」と指摘する。東西冷戦構造が強まる中、米国の後に旧ソ連(現ロシア)が、次いで英国やフランス、中国なども核兵器保有国となり、核兵器の破壊力を「抑止力」として利用していった。

新たに水素爆弾や中性子爆弾のほか、運搬手段として戦略爆撃機や弾道ミサイルなどが開発された。水本教授は「現在、各国に配備されている100キロ前後の核弾頭は、広島型原爆の16キロに比べ約6倍の威力がある」と解説する。

米ソが核戦争寸前に至った1962年の「キューバ危機」などを契機に、核保有国は力の均衡を維持する「核軍備管理」や、段階的に核兵器を削減する「核軍縮」に向けて協議した。米国の核問題専

門誌「原子力科学者雑誌」によると、世界の核兵器保有数はピークだった86年の6万4449発から、2013年には1万215発に減少した。

（高田未来）